

第9回 NBRP・コムギ（第2期）運営委員会 議事録

日時：平成23年9月25日（月）9:00～13:10

場所：福井市地域交流プラザ 6階会議室

出席者：18名

NBRP・コムギ 運営委員会委員

辻本、遠藤、河原、村井、寺地、藤田、那須田

NBRP・コムギ 実施担当者

川浦、坂、岸井

NBRP・コムギ 研究協力者（平成23年度）

松岡（データベースワーキング）

NBRP 事務局

森脇推進委員、佐藤事務局長

コムギ小委員会委員（オブザーバー）

宅見、田中、加藤、森、村井（み）

議長：辻本

書記：村井（み）

確認事項

・第8回 運営委員会議事録確認（第9回資料1）

・NBRP・コムギ組織および連絡先確認（第9回資料2）

小松田、池田、丹野は前回新規加入の推薦が以前あった（小松田、池田は本人未承諾。
丹野は承諾済み）。

西田（岡山大）、奥本（京都大）が記載漏れ。

岩永（作物研）は JIRCAS に異動。

辻本メールアドレス変更 “muses” →変更後 ”alrc”

報告事項

1. 23年度前期 事業報告

1-1. 種子系統（第9回資料3）訂正：資料中2. 業務担当者 横浜市立大学 坂智宏→

坂智広（誤記修正）。

（総括・河原）

- 物集女の技官 2 名は今年度で再雇用の期限が切れる。来年度から新規技官 1 名が内定。技官の減分、パートタイマーを増やすなどの対応が必要。
- 毎年行われてきた種子の更新は全て登録済みのもの（NBRP には種子更新の有無にかかわらず一括で登録してある）。
- 物集女の未整理品とは例えば USDA から分譲を受けた野生種などで、これらの種名を確定して番号を付ければ NBRP に新規登録できる。

（木原担当分の詳細・第 9 回資料 4（岸井））

- 増殖に失敗したものは、ある程度系統数がまとまったら再増殖する。

1-2. 種子配布窓口（第 9 回資料 5（那須田））

- 海外からの種子分譲依頼のうち 1 件で、ドル建てであったために受け付けできなかった。また、恐らく悪戯と考えられる依頼が海外からあった。
- カード決済導入の可能性を探るべき。
- 海外からの種子分譲依頼元はドイツ、アメリカ、カナダ。

1-3. DNA リソース（第 9 回資料 6（川浦））

1-4. DNA マーカー（第 9 回資料 7（那須田））

- 新規パネル 190 系統のジェノタイピングと表現型データの収集を行っている。
- 48 系統の SSR 多型調査で web 未公表のものを公表した際にはメーリングリスト等で周知してほしい。
- データが蓄積されてくれば推奨 210 マーカーセットのプライマーの需要はある。

1-5. ゲノム情報整備プログラム（第 9 回資料 8（那須田））

- mRNA の配列を次世代シーケンサーで読み ABD 各ゲノムの多型を検出する計画。岩手生工研・寺内、滋賀県立大・清水と那須田で申請したが不採択。
- 例年だと 3~5 件採択のところ今回は 2 件だけ。約 6000 万円はバックアップに回される。

2. KOMUGI データベースワーキング報告（松岡）

- 次回の会合が 11 月 18 日 13 時から遺伝研に決定。
- KOMUGI のマイクロアレイのページが改訂された。

- 種子の系統情報と形質データとを合わせて表示する機能を付けるよう岸井とともにホームページを作って検討中で、今年中の公開を目指す。

3. 長期保存・バックアップワーキング報告 (第9回資料9(岸井))

- バックアップのための追加予算、作成手順、計画について。未整理系統の整理よりバックアップを優先する。
- 収穫したてだと乾燥が不十分になる可能性があるため、バックアップ作業を先に済ませた後、アルミパックする。その間に乾燥が十分になる。
- バックアップの追加予算で購入した備品の詳細は、真空装置はもともと1台購入予定だったのを同じもの2台にして木原と物集女に設置、 -80°C 超低温庫は完全長 cDNA のバックアップ用で1台を京大遺伝に設置、 -20°C 冷凍庫は種子用で木原と京大遺伝に各1台を設置。
- セキュリティーについて確認(保管庫の施錠)

4. 学会等での活動報告 (第9回資料10(那須田))

- ITMI (International Triticeae Mapping Initiative) 招待講演として NBRP コムギの事業内容を紹介(2011年9月5~9日、メキシコシティ、那須田ら)。
- 日本遺伝学会第83回大会でシンポジウム講演として NBRP ユーザーの立場からリソースを利用した研究を紹介(2011年9月20~22日、京都、宅見ら)。
- 今年の分子生物学会は横浜で担当(川浦)。

5. 関連事項報告

・講習会の開催 (第9回資料11(那須田))

コムギの仲間 (*Triticum* 属、*Aegilops* 属) の外部形態による分類と(河原担当)、染色体観察(遠藤担当)講習会を2011年5月31日~6月1日、京都大学北部構内で行った(参加者29名)。

- 今後の要望として FISH、GISH、分類講習の継続をとの意見。
- ユーザーを増やすため違う植物の研究者にも参加してもらえば広報に工夫が必要。
- KOMUGI のページから染色体観察の動画サイトをリンクするように更新する。
- 高校の指導要領が変わり実習が増える。コムギの実験用の教材を開発する。教材に適した系統を NBRP コムギに寄託してもらえば増殖して配布できる。
- 教育用の試料として NBRP の材料が欲しいとの要望が多い。推進委員会で話をしたら文科省側は内部の管轄の違いがあるので難しいという。しかし、繰り返し話をしていくべきであろう(森脇推進委員)。

- NBRP からなら誤りのない教育材料を提供できる。標本をアクリル樹脂に包埋することも検討。
- 繰り返し講習を行うことが重要。高校教員に免許更新にかかわる講習などで受けてもらうことができれば裾野を広げられる。エギロプスの分類などの体験によってその分野に目覚める人もおり、次世代への人材育成につながる。今回の講習内容のほかにも共有したい技術があれば提案。

審議事項

1. 平成 23 年度後期 事業実施計画

1-1. 種子系統 (第 9 回資料 3、4 (河原))

- 物集女で約 800、京大遺伝で約 350、木原でバックアップ兼用として約 400 系統を更新する予定。
- 更新系統選択の基準は、更新年度の古い順、パンコムギは古いもので約 20 年、エギロプスは 7、8 年。
- 他殖性の高い *Ae. speltooides* でも自殖種子が取れるので他と同様に袋掛けしている。

1-2. DNA リソース (第 9 回資料 6 (川浦))

- cDNA クロームはバックアップ用の複製を作製、クレジット決済システムを整備。
- EST・完全長 cDNA の配列データは登録して KOMUGI から公開、マイクロアレイは続行、TAC クロームは劣化のため DNA を更新。
- タルホコムギの BAC ライブラリを配布可能に整備する可能性がある。
- TAC はもう需要があまりないのでは？
- BAC に関しては NBRP で気軽に依頼できるシステムがあるとよい。
- 農水省の事業で生物研が所持している BAC は購入したものと思われるが、その費用と有用性によっては、それを NBRP・コムギでも購入して持ち直すことも考えるべき。
- EST の残数はこれで全て。増える予定はない。
- オオムギのマップとコムギを繋げていく場合にゲノムジッパーというデータベースにコムギの cDNA を当て直すことが IWGSC の中で行われており、来年初頭に公開される予定。これが公開されればコムギの完全長にマップされたどのオオムギの配列が当たっているかということが分かる。

1-3. DNA マーカー (第 9 回資料 7 (那須田))

- 表現型データ収集、F₁ 種子の播種、SSR のジェノタイピングをおこなう。
- 運営委員会の承認が得られれば DArT マーカーでジェノタイピングしデータ公開。
- DArT マーカーを選択した理由は、ハイボリュームマーカーであるため。*Ae. tauschii* のジェノタイピングの先行研究 (辻本) があり、多型検出力は高い。

- DArT の費用はプレート 1 枚 (96 系統) のジェノタイピングを得るのに 70 万円。要 3 カ月。得られたデータの公表について DArT 社との間で拘束は無い。KOMUGI のページで表現型のデータを公表したら第 3 者にすぐに論文を書かれてしまうので公表のタイミングを考慮する必要がある。
- 今回調査した以外の表現型に興味が出たとき、その表現型の分布を調査し、ジェノタイピングとの相関があれば調べることができる (ゲノムワイドアソシエーション解析)。他の人が調査していない表現型をパネル 190 系統で調べて NBRP のジェノタイピングデータを使えばアソシエーション解析が可能になる。
- 今年度 DArT マーカーでのジェノタイピングを実行することを承認。得られたデータは、本プロジェクトの成果として公開する。SSR はアンカーとして重要で価値は減じない。
- パネル 190 系統の DNA を使って特定の遺伝子や遺伝子座について調査したいという DNA 分譲の要望があれば応相談。農業形質に無関係の調査に使ってもよいが、データのフィードバックが必要 (論文公表後で可)。
- コムギの中で分かっている機能的な突然変異や対立遺伝子の同定例など一回整理した方がよい。クローニングされた遺伝子に関しては整理されたデータファイルがあるが、アレルの同定法まではまだ。農業形質に関しては石川らが整理したデータがある。

1-4. ゲノム情報等整備プログラム (那須田)

今年も募集があれば積極的に応募する。

2. 各ワーキング (データベース、バックアップ・長期保存)

データベース (松岡)

- 次回の会合で議論してほしい案件があれば連絡してほしい。
- ムギネットなどのメーリングリストで要望を寄せてもらうよう呼び掛ける。

バックアップ (岸井)

- バックアップは今年度中に完了予定、真空パックはできるところまで。
- パックなどシステムは横浜と京都で統一する (岸井の主動)。
- バーコード管理は 2 次元バーコードを使う。
- 保存方法の標準を公開の要望あり (統一された方法はまだない)。

3. 第 3 期に向けて (組織、体制、業務内容等)

【これまでの事業の総括】 (辻本運営委員長)

- 第 1 期 : 3 機関体制 (中核が京大、サブが木原と鳥取大)。既存のリソースをどう保存するかが主眼。

- 第2期：2機関体制（鳥取大のリソースを京大に移管して、中核が京大、サブが木原）。リソース保存に加え、研究者のコミュニティーを発展させ、研究基盤のインフラを充実させ、リソースがより利用されるよう事業を推進してきた。
- NBRP・コムギ運営委員会はユーザーの会。
- 運営委員長はユーザーの代表。
- 第2期から実施者でなくなった辻本が、運営委員長に就いた。
- 世界の潮流に乗り遅れないために第3期をどう進めていくべきか議論したい。

3-1. 機関の体制について

- 研究室単位では人手不足（人員削減等）のため第2期同様の体制の継続は困難。
- 前回の委員会で、研究室単位でなく組織的に事業を運営するために、京大の改組を要望する意見を全会一致で表明した。
- 講座は変えにくいので、別の形で組織を立ち上げる方が良い。バーチャルであっても組織が立ち上がると運営委員会や協議会のような形で京大外の人が運営に関与できるので講座だけの組織として運営するよりよい。
- 京大の農学研究科長としては、特定の研究室での運営では運営の継続が保証されないもので、農場の移転問題が進展したら農場の中に資源保存センターのようなものができればと希望している。実際の栽培には現行の温室などの設備を使用してもよい。
- コミュニティーとしては京大にイニシアチブを取って運営してもらいたい。どの大学でも人的余裕がないのは同じであり、中核機関である京大がイニシアチブを取らないのであればイニシアチブをとれる大学を中核にすればよい。イニシアチブを取れる大学がほかにあるなら、そうすればよい。また、できるところが持ち回るのもよい。
- コムギのコミュニティーの後継者育成を考慮すれば、京大がコミュニティーの中核を担うべきと思う。種子を増殖して配布するだけであればほかでもできるが、それらを使って研究していくには学生の時代からコムギに接している方が良く、京大には優秀な学生が集まる。京大からコムギが無くなるということは優秀な学生がコムギに関わらなくなるのでコムギ研究の衰退に繋がる。
- 栽培・維持に関しては京都大学の栽培植物起原学に新規の技官が決まり担保されたが、教員の確保は担保されていないのが現状。
- 後継者育成で言うと、必ずしも京大で人材が育成されてこなかった。
- 京大遺伝には人材が来ないと、来ても博士課程進学を勧めなかった。過去の例を見ても人材輩出のペースは今で十分。
- 今の国際的なコムギ研究の潮流の速さを見ると、人材育成のペースが現状のままでは、日本のコムギ研究は世界に取り残される。すでに取り残されつつある。
- 過去には大学院が大きな大学にしかなかったので大学教員になる人材は京大出身者が多かったが、昨今ではそうでない方が大学教員になっている。京大にコミュニティー

の中心的役割を期待することはラボの伝統があるので世界的に正当化はされるであろうが、よい人材を理由に京大をコムギの中核とするのは当たっていない。

- 第 3 期を考えると中核が京都、サブが横浜の体制は、地理的にもアクセスや栽培環境の面でも良い。ユーザーとしての立場から、同じ体制を継続してもらいたい。また、良い人材は京大でなくてもコミュニティーの中で育てていくべきで、コミュニティーの中に京大の伝統の流れがある。
- 京都の木原先生の伝統に依存する傾向は無くしていくべき。閉鎖的で発展性が無い。ユーザーの裾野を広げなければならない。人材育成は必ずしも京大でなくてよい。ゲノムを決めたのは木原先生であるので、それは「日本の誇り」として考えるべき。
- 裾野を広げるのは良いが木原先生の偉業や伝統が雲散霧消してしまうのが心配なので、幹である京大はしっかりしてほしい。第 3 期だけに関して言えば京大、木原の体制は良いが、那須田の負担が多過ぎるので、事務などをする人を雇うなどして、中心になっている人の業務が減るように組織を作るべき。
- 人を雇えば雇うほど業務が増えるという矛盾があるが、どこかで転換できないと組織は成り立たない。5 年単位であるから工夫次第でできるのでは。
- 今後 5 年間は、中核は京大とすべきで一致。
- 木原生物学研究所は現行通り京大（中核）と木原（サブ）の 2 体制を希望。ゲノムリソースは配列が出てしまえばおしまいという意見もあるが、大学としては「木原」と冠しているので NBRP のサブ機関である方が望ましい。コムギのゲノムリソースから出てくる BAC クローンなどを専門に扱う部署になればよい。

3-2. 第 3 期は何をするか

- 今あるシステムを維持・配布することは最低条件。
- 第 2 期では種子システムに付加情報を付けることに力点があった。第 3 期でもさらに付加情報を追加していく流れか。
- 今までは開発を抑えてきたが、開発をしないと付加価値が付かない。しかし、開発は科研費で行うべき範疇と判断されるので、NBRP 計画の中に開発を盛り込むとその分予算を減らされかねない。（事務局サイドより）
- 科研費には系統育成の項目が無い。科研費の項目は毎年見直されているので、バイオリソース委員会の方から科研費の委員会に申し入れ、ある程度の応募件数が担保できれば項目ができる。
- 第 3 期では付加価値を付けることが重視され、そのため開発に予算を割くことを緩和する議論がある。中核、情報、ゲノム、基盤が連携してリソース開発をプログラムできるような別枠の予算枠を設けて公募制で行うというのも、現在、選択肢の一つになっている。（事務局サイドより）
- これからは系統開発とジェノタイプングがワンセットの時代になる。

- 一番の財産は多様な系統を持っていること。これからやるべきことは今ある系統のジェノタイピング。世の中の研究の流れは交配して作成した分離集団を使う方向であるが、我々は広い多様性を含むリソースを持っており、分離集団を使う方法ではこの広い多様性を活用することにはならない。現在はコムギでも高い精度のジェノタイピングシステムを使えるようになった。
- 更なる系統収集の必要性は SSR などでのコレクションの全体をジェノタイピングして調べてコムギの多様性の全体がカバーできているか知ればわかる。六倍体に関しては京大で現在、パイロット実験を行っている。D ゲノムに関しては大分分かってきていて、ミッシングピースがあり、NBRP に登録済みの系統でコアコレクションを作るとミッシングピースが抜けたままになる。
- NBRP で求められていることは世界水準のストックなので未来を見据えた仕事をやるべき。RIL を持っているだけではだめで、その次を見越した戦略的なものを打ち上げていく必要がある。具体的な方法論としては、GWAS や NAM を中心に、包括的に変異を抽出できるような系統をデザインしていくべき。イネではそのように進めている。
- 系統にジェノタイピングの情報を付けるとなると大きな仕事になる。ジェノタイピング情報とセットで揃えられないなら系統だけを作っても仕方がない。
- 5年あれば今ある約1万系統全てを GBS で SNPs によるジェノタイピングができる。
- 分離集団を作るのは個々の研究がやればよいことで、我々がこのプロジェクトでやるべきことは今持っている多様性の全体像を見るということ。全体の多様性を見るシステムを導入すれば、副産物として、分離集団のための特定の 2 系統の多型を取ることもできる。
- 今ある NBRP 系統のジェノタイピングを取るということについて、合意を得た。
- フェノタイピングもしないといけない。後で必要な調査項目が加わっても、コアコレクションを決めておけば後から取れる。
- フェノタイピングを取る条件をきっちり決めておかないと、使えないデータになりえる。環境で形質が変わりうるので色々な場所でフェノタイピングデータを取る方が良い。コアコレクションを決めて、得意なところでそれぞれの形質データを取ってもらえば良い。アメリカのトウモロコシの研究で開発されたバーコードシステム（神戸大山崎氏導入）を、今年度中に導入したい。
- コアコレクションのジェノタイピングをして多様性解析をし、一方でフェノタイピングをするということで第3期のプロジェクトの概要は定まった。
- 何を具体的にやるかをあらかじめオーソライズしておいた方が良い。
- AABBDD ゲノムのジェノタイピングを継続、次に AABB、AA に広げていく。AABB に関してはフェノタイプを取って代表的な AABB を交配する。マーカーには DArT を使う。
- DArT に類似したシステムとして注目されているのはアレイにハイブリダイズして、プ

ローブに相補的な配列だけを取ってきて、次世代シーケンサーで読む方法。岡山大学の資植研の機械（イルミナ）でジェノタイピングが取れるのか不明。

- 農水の中で生物研がそのような解析の機能を担っているようにコムギのコミュニティーの中にジェノタイプを請け負うセンターがあるとよい。ジェノタイピングをやりたくてもやれていない材料が潜在的にかなり沢山あると思われ潜在的な需要は大きい。
- 情報処理にはインフォマティシャン（複数）の確保が絶対必要。
- 種子の保存だけでなく、今後単離する重要農業形質の遺伝子が実際に自然環境下でどれくらいの効果があるのかを明らかにするためにも採集地の気候条件や土壌条件などの情報を種子の系統情報に付加していくことを次にするべき。
- パブリックな地形や地理の情報はあるが、どのリソースもリンクさせることはしていないので、コムギで開始するとよい。よく似たことは ICARDA で気候、土壌、病気などに関する情報をデータベースにしている。第 3 期はジェノタイピングに資金を集中させなければならないが、その次にはそのようなことも考えていくべき。ジェノタイピングとフェノタイピングを行って公表したら、FIGS のようなシステムを持っているところが逆に NBRP の情報を欲しがらるはず。
- ジェノタイピングの結果、多様性のミッシングリンクがあれば、採集に行く必要性が出てくる。科研費の海外学術調査などで行っている現行の探索地の選定は戦略的でないので、NBRP で得られる知見に基づいて探索地や対象種を決定できたらよい。
- NBRP で探索は行えないが、今あるコレクションは過去に苦勞して収集されたもの。その探索のノウハウの継承は必要。
- リソースの場合は利用されるようにすることが大事で、採集したものは NBRP に寄託して入れてもらわないと何もないのと同じ。採集した人たちがコムギのリストを育てていくという感覚が無ければなんともならない。NBRP 側は、採集者が寄託しやすいシステムを作る。採集してきたら NBRP のデータを使って解析し、終わったら NBRP に寄託するという形が理想。今、種子が整備されている材料に関して地域情報は入っていて、Google map の上で閲覧できる。

3-3. 第 3 期にかかる世代交代の対策と新体制作り

3-3-1. コムギセンター（仮称）の設置

- 京大の中でバーチャルでも組織を作るということは遠藤農学研究科長でないとできないこと。第 3 期の間にかかなりの退職者が出る。かつて植物生殖質施設であったのが 1 研究室になった。その逆に、現在の 1 研究室を 1 つの施設にしても、看板を変えるだけのことであり人員体制が今と変わらない。
- 別のセンターを作って、複数の研究室の関係する教員・スタッフが兼担で入る形をとれば学内の他の人も兼担で入れる。農学研究科内に設置して、コムギだけでなく研究科のほかの作物種の遺伝資源にも入ってもらうかたちで検討を進める。

3-3-2. NBRP コムギ事務局の設置

- 代表者は、実施者になるべき。現在は基本的なところはかなり那須田がとりまとめている。現在、運営委員会に係る仕事が大きな負担。
- 事務局を設置すべき。本来、ユーザー代表である運営委員長が運営委員会開催の準備をすべきであり、第2期においても当初は、委員長側で作業を行ってきた。しかし、運営委員長には事務経費がなく、多大な作業を行うことが困難になり、次第に、実施者に依存してきた経緯がある。この状態では、ユーザーと実施者との間での適切かつ公正な関係を維持できない。そこで、中核機関に、NBRP経費によってパート事務員を雇用し、運営委員長と事務局の間で運営委員会開催に係る作業を行う必要がある。この事務局は、種子の出し入れや種子のチェックなど、NBRPのあらゆる業務を兼ねても良いと思う。
- 事務の人を一人雇ったら済むという問題ではないが、英語ができ事務能力の高い人を見つけてしっかりした事務体制を取るべき。それが無ければこんな大きな事業を動かせない。各リソース全体を通せば、課題管理者のところでもこういった事務採用をしている。
- 事務局を作るとなると人を雇用しなければなくなるので横浜への配分を減らさざるを得ない可能性がある。NBRP コムギの事務として雇用し、勤務地が京大という形で納得してもらおう。

3-3-3. 第3期の代表者・実施者について

- 代表者は那須田に変更することで了承。
- これから書く申請書について、中身は議論したが、サポートが必要。

3-3-4. コムギ研究者コミュニティー内での国際対応——情報収集と周知の方法

- コンソーシアムの中で、例えばeWISやデータベースのように機能分担をしてきたが、国際対応の担当者はいなかった。そのため今回、国際コンソーシアムの情報が遅れた。国際的動向、日本の対応について、共通認識を持つための情報の還流が必要。
- 誰か一人はITMIに必ず行くなどの仕組みが必要。
- 運営委員会と実施者の中に担当を決めておいて、事務局の人はNBRPのセクレタリーとして機能し、収集した情報は事務局に報告して、事務局がその情報を流す仕組みが良い。

4. 運営委員会委員の構成と実施者の関係についての見直し

【運営委員の見直し】

- 運営委員会のメンバーの更新が必要。NBRPの根幹は種子なので、前回決めた取り決めを踏まえ、河瀬（もしくはその代わりとなる人）、宅見、松岡をメンバーとする。実施者を外す。
- 運営委員長は辻本。

【実施担当者の見直し】

- 運営委員から外した遠藤、河原、荻原、那須田を入れる。

【研究協力者について】

- eWIS の編集長とデータベースワーキングの委員長を入れる。
- 第 2 期では木原で笹沼が協力者になっていたが、第 3 期は必要ない。問題があるときだけ相談すればよい。

【小委員会】

- 現在の小委員会委員は一度整理する。コムギを主に扱っている PI に参加してもらう。メンバーは後日、辻本、那須田、宅見、松岡で抽出するほか、農水などからのアドバイスに基づいて選出する。

5. その他

コムギ研究の世界の動向と国際コンソーシアムの立ち上げ

- 国際的なコムギコンソーシアムの動向が変わった。荻原が運営委員長で 2013 年に国際コムギシンポが横浜で開催される予定で、これを進めている過程で突然 IRIWI というコンソーシアムの話が出た。これは G20 農相会議がフランスで開かれて、世界のコムギの不足は非常に重要な問題であるから、世界で個別に研究をするのではなく世界でコンソーシアムを作って行うべきということが出てきた。IRIWI には日本が入っていなかった。IRIWI は世界で研究の重複がないように進めていこうというもの。パリでのキックオフ会議には岩永、那須田、半田（生物研）、小田（作物研）が参加。
- IRIWI は既存の組織と競合するものでなく、ファウンディングエージェンシーでもない。参加国が資金を拠出して運営しようというもの。資金を提供するものでもない。全ての研究者がコンソーシアムにはいってくださいという性質。当面は国際的な機関である CIMMYT と BBSRC と INRA が中心となって運営。G20 の加盟国が中心になるが全てのコムギ研究者の参加を歓迎するもの。IWGS の開催に合わせて IRIWI の会議とセッションを組んでほしいとの要望がある。日本ではどこが資金を拠出するのかという問題はあるが、G20 の農相会議から派生しているので農水省が拠出することになるだろう。
- 国内のコムギ研究のコンソーシアムである我々の組織が農水省を通じてうまく対応していかなければならない。IWGS は遺伝学で先進国、IWC は作物学で発展途上国の人が多い、互いに独立している大きな組織であり、これらを統合する方向。2 年ごとに交互に開催してコムギ研究者には両方に参加してもらおうという動きがある。また、今回情報が遅れたので、国際情報を収集する機能もこのボードの中に入れたらよい。
- 国際コンソーシアムのイニシアチブとして、各国ではコムギの拠点機関が入っているので日本としても作物研など国の機関が入る方が良い。国から一人が代表する形。そ

の下の組織の作り方については各国に委ねられている。機関が入るように JIRCAS の岩永や作物研に働きかけるべき。キックオフのときには日本は入れなかったが、また新しく組織が作られていくときにはうまく入っていけばいい。かなりのコムギの遺伝資源や実験系統が戦略的に動いているので、これらをうまく使えるように動けば我々の地位も向上するだろう。

(以上で運営委員会は終了)

コムギ小委員会

1. 第 12 回 国際コムギ遺伝学シンポジウム (坂)

(経緯と報告)

- 5月に事務局からワーキンググループと連絡を取り進めた。
- IRIWI の中で、IWGS と IWC の統合の議論があり、それに伴い IWGS が廃止される懸念があった。第 12 回 IWGS をベースにして IRIWI の活動を進め、遺伝学、ゲノム研究を育種につなげ、日本のリーダーシップも進めたいとする意見を主張し、お互いに協調しあっていくという方向で話し合ってきた。

(準備状況)

- 会期：2013 年 9 月 8 日～14 日
- 場所：パシフィコ横浜・アネックスホール (400 人ホールと、ポスター会場)。
- 9 月 8 日にプレシンポの形で WI のミーティングを開催。
- キーノートの招待講演者は詰めてきて原案ができています。
- ホームページの初回の開催案内を公開する方向。
- ロジスティックと PCO 会社関係と話をし、年内にホームページを出し、来月、再来月くらいでメーリングリストなどを通して開催案内を大々的に流す予定。
- 育種学会ごとにミーティングをし、2013 年年頭にレジストレーションをオープンし、3 月後半に早期受け付けの締め切りとアブストラクト・プロシーディングスの締め切り。5 月末までの延長を考えながら、7 月にクレジットカードの決済の期限。

(問題点)

- 資金対策。参加者が非常に少ない可能性も (物価高、円高、放射線の風評)。現段階では参加費を 7 万 5 千円というベースで考えているが、それで固定費を賄えるか不明。魅力的なプログラムを作って参加者を増やす方向で努力。
- コムギのコミュニティーを通して助成金、協賛金、寄付金などを取れるように情報と根回しのための繋ぎ、紹介状などを事務局に。
- 招待講演者の費用、印刷物の費用などで経費削減を図る。
- OECD の Co-operative Research Programme という国際会議支援の予算があり、今

月応募した。これが通れば、現段階で約 15 人の予定である OECD 加盟国の招待講演者の費用全額にあたる約数千万円を持ってもらえる。

2. eWIS 先に議論済み

3. ムギ類研究会 (川浦)

- 11月25日(金)午後～26日(土)昼ないし午後、場所は木原生物学研究所。
- この会のあり方も考えていかなければならない。内容を考えるべき。
- 代表を荻原から河原に変更するという話もある。
- ムギ類研究会は今後は学会では聞けない話が聞けるような先生方をお願いする方向で検討する。
- たくさんの参加者に来てもらうために他の学会とジョイントするとかの方策も考慮すべき。

-----以上-----